

学習適性

2022. 3. 15

本日も、英語指導をもとに考えていきたい。入門期の英語指導に関して、文法中心の指導と会話中心の指導を比較した研究がある。個人差を考慮せず2つを比較した場合には、ほとんどその効果に差がなかった。

しかし、言語性知能に関する個人差を学習適性として考慮したところ、言語性知能の高い子どもたちは、文法中心の指導の下でより効果的に学ぶことができていた。逆に、言語性知能の低い子どもたちは会話法中心の指導の下でよりうまく学ぶことができていた。

言語性知能とは、言葉を正確に、巧みに操る能力であり、国語の学力とも深い関連がある。かつて、中学校の英語教員は、英語は中学校で初めて学ぶから、全員が同じスタートラインに立っており、誰でも努力次第だと言って生徒たちの奮起を促したかもしれない。

しかし、文法中心の指導の下では、小学校で国語が苦手だった子たちは、最初から不利な立場に立たされている。そうでなければ、学習開始からわずか数か月しか経っていない定期テストで、生徒たちの出来具合に大きな差が出るはずがない。

一方、会話中心の指導は、言語性知能の影響をあまり受けない。実際、文法を中心とした学校での英語学習は苦手だったが、海外で生活し、必要に迫られて英語を話したり聞いたりするうちに上達する人は少なくない。

だからといって、会話中心の指導の方がよいのかというと、一概にそうとも言えない。会話中心の指導の下では、言語性知能の高い子たちは、その潜在する可能性を十分に実現できない。

では、どうすればよいのか。言語性知能が高い子には文法中心の指導、低い子には会話中心の指導をすれば、すべての子どもたちがその潜在的可能性を最大限に開花させることができる。

同じ学年、学級の子どもたちの間にも、その学習適性には大きな個人差がある。個々人の学習適性との適合度を最大化すべく、指導法や教材を調整したり開発したりすることを学習指導の最適化と呼ぶ。個別最適な学びや、経済産業省の「未来の教室」で用いられた「個別最適化された学び」の最適という表現は、ここからきている。

子どもたちがうまく学ぶことができないのは、能力がないからではなく、その子の学習適性に適合した指導法や教材と出合えていないからであろう。とはいえ、話は簡単ではない。学習速度、学習スタイル、興味・関心などに対応し、異なったペース、教材、課題、指導を提供するのである。そう簡単にできることではない。

だが、このことを意識して授業をするか、全く意識しないで授業をするかでは大きな違いが生じてくる。授業を担当する者として、ぜひ意識したいことである。